

2021/05/08 公開



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

■ユダヤ入門シリーズ■

21 「暗黒の教会史～異端審問所」

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。今日はユダヤ入門シリーズ第 21 弾！パチパチパチ！デバイスの向こうでパチパチして下さったあなた、ほんとにありがとうございます。

今日は、スペインのユダヤ人の後半戦をご一緒に考えたいと思います。イベリア半島にまだイスラム勢力が残っていた時は、ヨーロッパの王様たちはユダヤ人を優遇したんですね。イベリア半島を取り戻すために、ユダヤ人を味方に付けるほうが何かと有利だ。メリットが大きい。そのため優遇し、改宗を働きかけ、それに応じたユダヤ人もたくさんいました。

ところが、イベリア半島からイスラム勢力が一掃されて、全部カトリック王国（スペインとポルトガル）が成立するようになると方針が変わったんです。今までは「まあまあ、改宗しなさいよ」と非常に甘い対応だったのですが、全部がカトリック王国になった時、「表面上だけの改宗ではあかんで。心の奥底に至るまで本物でないとあかんねん。そんな異教的な要素を持ち続けているのは教会に悪影響を及ぼすから、本物でないとあかんねんで。」

そのようになって、改宗したユダヤ人に対して「おまえ、本当は改宗してないんじゃないの？」「おまえ、もしかして異端と違う？」そんな攻撃が始まったんですね。この攻撃の背景には、当時の一般民衆の妬みがあったんです。ユダヤ人に対する妬みが。だって、ユダヤ人は元々よそもんじゃないか。よそもんなのに、形だけの改宗をして、王侯に取り入って大出世してる。貴族の一員にもなってる。我々が手の届かない階級に行っているじゃないか。妬ましい。

大義名分上は「本物なのか？ 二セモノじゃないのか？ 二セモノは退治すべきだ！」ということで、ユダヤ人資産家たちが襲撃を受けるようになったんです。こんなことをほったらかしにしておいたら、国の中がムチャクチャになってしまう。そこでローマ教皇庁は、「一般民衆の素人が、誰が異端で 誰が異端でないとか、勝手に判別するのは慎みなさい！そんなことは簡単に決めるべきではない。誰が異端で 誰が異端でないか、これはプロが決める！」それで、異端を取り調べる機関を設立しました。異端審問所です。

その初代長官こそ悪名高きトマス・デ・トルケマダ（1420-1498）。悪名高きと申し上げましたが、彼が長官を務めていた 18 年間、火あぶりにした人 8000 人以上いてるんですよ。しかも、無実の罪で亡くなった人たちがほとんどです。

もう色んなところから密告が入るんです。「コイツ、実は二セモンです。」「彼女は実は魔女です。」そんな情報が入ると拷問する。拷問をやめてほしいために、本当は偽っていないにもかかわらず、「私は偽者です」と自白せざるを得ない。苦しみから逃れるためにそうせざるを得ない。「自白したな。火あぶりだ。」処刑されていく。見るも無残、おぞましい話があったのです。

一説によると、トルケマダ自身がユダヤ人で、彼のご先祖にコンベルソ（改宗者）がいた。その子孫だと言うのです。「いやいや、そうじゃないよ」という説もあるんですよ。

だけど、彼自身が改宗ユダヤ人の子孫だったという説があるんですよね。それは覚えていたほうが良いかもしれません。

さて、異端審問所に呼び出されたのはユダヤ人ではないんです。ユダヤ人は異端じゃない。異教です。異端審問所に呼び出され、拷問を受けたのは改宗したユダヤ人だけです。ユダヤ教のままの人たちは、元々異端ですらもないので迫害されませんでした。改宗に応じたユダヤ人の子孫たちが、むごたらしく殺されて行ったんです。これは、ユダヤ人に見ればたまったもんじゃないですよ。「改宗しろ、改宗しろ」と働きかけて、それで改宗したら「おまえ改宗したからニセモンだろ」と言って迫害する。ムチャクチャじゃない、これ。

実はね、火あぶりにされたユダヤ人たちの約 1000 倍の数の人たちが、異端のレッテルを貼られて、酷い拷問と迫害で命を落として行ったんです。それはクリスチャンたち。このクリスチャンたちは、ローマ教皇庁の見解と違う考えを持った人たち、新約聖書をラテン語以外の言語に翻訳した人たちです。

彼らは異端だということで殺され、ユダヤ人 1 人に対し 1001 人のクリスチャンが火あぶりにされました。ユダヤ人迫害で犠牲となったユダヤ人の 1000 倍のスペイン人クリスチャンが、異端審問所で異端のレッテルを貼られて命を落としたと言われています。

なぜこんなことが教会の歴史の中で起こったのか？ 教会の中で起こっている 本当のクリスチャンやユダヤ人信者への迫害の醜い歴史については、イエス・キリストが前もって預言してたんです。イエス・キリストは弟子たちに たとえ話で語られました。

マタイの福音書 13 章 24 節～30 節

イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。

「天の御国は次のようにたとえられます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。ところが人々が眠っている間に敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて立ち去った。麦が芽を出し実ったとき、毒麦も現れた。

それで、しもべたちが主人のところに来て言った。『ご主人様、畑には良い麦を蒔かれたのではなかったのでしょうか。どうして毒麦が生えたのでしょうか。』主人は言った。『敵がしたことだ。』すると、しもべたちは言った。『それでは、私たちが行って毒麦を抜き集めましょうか。』

しかし、主人は言った。『いや。毒麦を抜き集めるうちに麦も一緒に抜き取るかもしれない。だから、収穫まで両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時に、私は刈る者たちに、まず毒麦を集めて焼くために束にし、麦のほうは集めて私の倉に納めなさい、と言おう。』

天の御国は、ここでは、キリストが地上再臨されるまでの期間のことです。毒麦も良い麦も、芽が出た頃は見分けがほとんど付かない。ところが実を結ぶ収穫の時になると、全く違った植物であることが明らかになるんですね。紛らわしい時に物理的に引っこ抜いてしまうと、良い麦まで被害を受けてしまうから、そんなことはおやめなさい。

同じマタイの福音書に、このたとえの解説が書いてあります。種を蒔いた主人は神。種が蒔かれた主人の畑は世界。良い麦はキリストを信じる人たち。毒麦は自称キリスト信者/偽信者。敵は神に敵対する悪魔（サタン）。

「この世界には、キリストを本当に信じている人だけではなく、キリストを信じていますよと聖職者のポジションに就きながら、実は本物のクリスチャンじゃない人たちがたくさん出て来て、彼らは並列して存在し続けますよ。世の終わりまで。」これが、このたとえの意味です。

教会の中にも本物の信者とニセモノの信者がいてるし、世界の中でクリスチャンと自称クリスチャンがたくさん出て来る。世界は教会のことではなくて、**畑**は教会ではなく世界のことなんですね。キリストの地上再臨の時に、これが正確に分別されます。偽信者は裁かれ、信者は千年王国という**神の倉**の中に入って行くんですね。

このたとえで重要なこと。それは、クリスチャンと名乗っている人が皆、本物のクリスチャンではない。神父や牧師の中にもニセモノはいます。本物のクリスチャンとそっくりの偽者のクリスチャンがいます。福音を額面通り信じていないけど、職業として牧師をしている人がなんぼでもいます。そんな人が権力を握った時、本物のクリスチャンを徹底的に迫害します。

このたとえは、もう1つ重要なことを警告していますね。

「“偽者を引き抜いてやろう。物理的に始末してやろう” ということをしてはならない。そんなことをすると、間違っ**て**本物のクリスチャンが処刑されたりするから。誰が本物で 誰が偽者かを人間が判断して、その判断に基いて死刑にすることはおやめなさい。そうすることによって、本物のクリスチャンが受けなくてもよい迫害を受け、殺されることがあるから。」**そのように読むこともできるのです。**

キリストは前もって、この世界でどんな事が起こるのか分かっていたので「異端審問で処刑なんてやめなさい！」それをやってるんです。なんでやったんですか？キリストの言葉をちゃんと聞いていないから。キリストの言葉に聞かずに自分のアイデアで動いたから。もしキリストの警告をちゃんと聞いていたら、こんな火あぶり処刑なんか**に**手を染めることはなかったでしょう。

教会歴史から目を背けず向き合っていくと、なんかね、苦しくなります。苦しくなるけど同時に、それを前もって見通して預言し、警告していた聖書の言葉の正しさを、改めて認識することもできるんですね。聖書を正しく知ること。それが、私たちが過ちから逃れることができる唯一の道なんですね。

教会歴史の中にあ**った**闇の部分について他人事と思わずに、「私って大丈夫？」ということをいつも考えながら、神に信頼しながら進んで行きたいなと思いました。

ご参考になったでしょうか。そうだと嬉しいです。

また『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。それまで皆さん、お元気でいらしてください。それでは皆さん、さよなら！

*使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。